論文要旨

題目　　近世後期服飾にみる意匠の創案と享受に関する研究

　　―文芸、美術、芸能との交流と近代への波及―

大久保尚子

本論では、近世後期の江戸を中心に展開した芸能や美術、文芸との交流の中に生まれた意匠表現に着目し、意匠の創案と享受という観点から、この時期の服飾文化の特質を捉え、その近代への波及の一端を把握することを試みた。特に戯作、浮世絵、絵本類を中心資料とし、それら出版物自体、また浮世絵師が意匠の展開に果たした役割に注目した。

第一章では天保期人情本の描写に着目し、創意を凝らした役者文様、著名絵師の印尽くしや寄合書などが芝居や書画自体に通じた人々に享受された様とその背景を捉えた。浮世絵や意匠見本から同趣の意匠の拡がりがわかるが人情本の描写には贔屓連中や書画会など趣味人たちの交遊を背景とした趣向の原点が見いだされた。 第二、三章では近世後期に特徴的な絵画的染織意匠につき出版文化との関係に注目し検討した。第二章では遺品例の展開を把握した上で文学作品の描写を検討し、絵画的意匠への享受者の意識や絵師の関与を捉えた。文政天保期の人情本より文晁、北斎、英泉ら人気絵師の画風を染繍で写す趣向が好まれたこと、その前提に絵師の画風への評価があり、摺物その他の出版物がこれを支えた様が窺われた。既存の「図」「版」を再現的に写す「写真（しようつし）」への指向が注目されるが、これも出版文化の充実を背景に持つと考えられる。第三章では浮世絵師の画業と花鳥画風意匠の関係を検討した。一八世紀後期、浮世絵花鳥画確立期に出現する美人画中の花鳥画風意匠描写は、画題の拡がりや実在感ある描画など同時代の浮世絵花鳥画自体を反映している。画中意匠と重なる同時代の重政の花鳥図絵本、これに影響を与えた一八世紀前期の草花図絵本には染織意匠参考書という位置づけもみられ、観賞主体の絵本の意匠への応用がわかる。浮世絵花鳥画が充実する文政天保期の美人画には独自画風を写す、装飾要素との融合など創意ある花鳥画意匠が描かれる。同時期多数出版された浮世絵師による絵手本は職人の下絵需要に応える側面を持つが、内容は絵師の花鳥画や美人画中の花鳥画風意匠と連続しており、花鳥画や美人画も意匠の参考とされた可能性を持つ。浮世絵師は多様な出版物を通じ絵画的意匠拡大に影響力を持ったと考える。第四、五章では戯作、浮世絵から生まれた見立趣向の意匠を検討した。第四章では天明期の『小紋裁』以下の京伝作見立小紋集中の作例を通常の染織意匠の枠組みに照らし、見立染織意匠としての特質を捉えた。意匠構成に形態レベルの見立が成立する場合も、古典意匠に擬え「やつし」の性格が明確なもの、題材の形状を縞や通常の小紋に当てたものと幅があり、さらに形態レベルの見立の成立しない自由な構成の一群があった。写生的な着眼、斬新な意匠感覚は全てに共通する。京伝作品の見立趣向の基調は、同時代には染織意匠の枠外であった題材を染織意匠風に仕立てあげる概念レベルの見立にある。『小紋裁』の場合、題材は江戸の人々が親しんだ名物、風俗であり、読み解きは

共感の増幅につながったと考えられる。第五章では京伝見立小紋を前後の時期の現実の染織意匠と比較し、その流れの上に位置づけた。細緻な読み解きの趣向、江戸名物への取材など戯作者浮世絵師ならではの京伝の着想は同時代には仲間内での遊びなど虚実の境に止まったが、化政天保期には浮世絵中の服飾描写のほか絵手本、型染め見本にも、見立の構成や京伝作品と同趣の題材による意匠が展開する。合巻における役者文様をはじめ、この時期の類想の意匠にも戯作者、浮世絵師の関与がみられる。ことに「模様描き」を修行した浮世絵師は画中意匠と中形など現実の染織意匠とを繋ぐ存在であった。京伝風の表現は次世代の戯作者浮世絵師に担われ、より広い層に共有され、現実に波及したと考えられる。第六章では、江戸東京名物を主題とした「見立模様」を含む明治中期の錦絵揃物「東京自慢名物会」を検討し、見立意匠をめぐる過渡的状況を捉えた。本作は歌舞伎の見物連中から企画されたが、劇界周辺では明治中期まで「手拭合」等見立趣向の遊びが継承された。愛好の背景には主題の読み解きが仲間内にもたらす共感があったと考えられる。「見立模様」作者梅素薫は幕末期に活躍した師の梅素玄魚同様、書画の版下と意匠家を兼業する近世の業態を継続し、遊びと仕事にわたり見立の才を発揮した。「見立模様」は題材において移りゆく江戸東京の重層的な姿を捉えており、意匠構成には構図上の見立に止まらない創作性が見いだされる。「見立模様」は江戸文化を継承した遊びの意匠であると同時に、現実に応用可能な明治期の創作図案でもあった。第七章では、明治中後期の図案作品にみられる見立表現の系譜を捉え、近世的な見立の着想の近代図案への展開を考察した。京伝見立小紋集は、西洋近代的な図案観が受容され始める明治中期には実用の「図案」として再認識される。西洋の図案研究に触れた美術家らは、異質なもの同士を重ねる見立の着想を用い異国の装飾様式と日本的で身近な要素の融合した図案を創作した。京伝作品を参照した久保田米僊、神坂雪佳の作品は「戯著」であったが、浅井忠や杉林古香、長谷川契華の図案は遊び心を含みながらも応用を前提とする。いずれも主題の読み解きを楽しむ点で近世的見立意匠の面影を残す。実用を旨とする近代的図案観とは相反する見立趣向特有の読み物性、寓意性が最新の時事風俗による多彩なイメージを導入し、結果として斬新な図案創作につながった。

以上、近世後期の歌舞伎愛好にかかわる趣向、絵画表現を写す趣向、見立の着想による趣向は、いずれも関連する芸能や美術、文芸の享受とともに着想され楽しまれた。これらは遊びの世界に根ざしており、意匠の趣向を案じ楽しむこと自体が芸能や美術、文芸享受の一変化形とも捉えられる。花鳥図絵本、摺物、戯作絵本など観賞主体の出版物は意匠の参考ともなされ、それらとあわせ職人向け絵手本、時に下絵も手がけた浮世絵師たちは実質的な意匠家の役割を果たした。明治期の事例からは、現実に応用されながらも「遊び」の要素を保ち続ける戯作浮世絵から生まれた江戸の意匠と、実制作への応用を基本とする近代図案との違いが把握されると共に、近世的な着想の継承が近代の図案創作の幅を広げた様を捉えることができた。